

主 題：人の心をご覧になる主

聖書箇所：マルコの福音書 12章35節～44節

イエス様は生涯、人々に対して救いのメッセージを語り続け、救いの御手を差し伸べ続けられました。しかし、パリサイ人や律法学者はイエス様を拒み続け、手をかえ品をかえてイエス様を陥れようとした。イエス様は、そんな彼らにもチャレンジなさいます。恐らくこのチャレンジは、あなたに対しても大切なチャレンジになることでしょう。

35節で、ダビデ自身がキリストを師と呼んでいるのに、どういうわけでキリストがダビデの子なのかと、イエス様が群衆に質問されます。皆さんご存じのように、キリストは、ダビデの子孫から生まれると預言されています。律法学者たちも確かにキリストをダビデの子と言っているけれども、彼らが望んでいた救世主は、イスラエルを勝利へと導いてくれる立派な兵士、普通の人だったのです。だからイエス様は、キリストに対する間違った考えを正そうとされます。

イエス様は36節「主は私の主に言われた。」で、当時、ユダヤ人たちがダビデによって書かれたと信じていた詩篇110篇1節のみことばを引用なさいます。この「私」というのはダビデ自身を指しているのは明らかです。最初の「主」とその後に出てくる「私の主」は日本語では同じですが、ヘブライ語では違う言葉が使われます。最初の「主」は「ヤーウェ」——エホバという、口にすることで神様を汚してしまうからと、ユダヤ人たちが絶対に口にしない言葉です。二つ目の「主」は、口に出して言えないヤーウェという言葉のかわりの言葉、「アドナイ」です。どちらも神様を指しています。ここでダビデは、「ヤーウェはダビデの主である、ダビデの子キリストに対して言われた。」と言いたかったのです。

これによって、キリストは単にイスラエルを敵から救い出すために来るのではなく、もっとすごい目的のために来られるのだということを示そうとしておられるのです。そして、ご自分こそが罪からあなた方を解放することのできる、救い主だということをもう一度明確になさったのです。しかし悲しいことに、しばらくすると、この群衆たちがイエス様を十字架にかけろと叫び続け始めるのです。

38～40節で、人々がイエス・キリストによって救われることを妨げようとしていた律法学者たちに対する警告をお話になっています。イエス様は彼らを非難なさいました。

1) 長い衣をまとって歩き回る。

当時のユダヤ人は長い衣をまとっていましたが、彼らは高貴の象徴である長い衣を着ることで、一般の人よりも自分たちが優れていることを見せびらかせようとしていた。

2) 広場で挨拶されるのが好き。

みんなから尊敬を得たいと思っていました。

3) 会堂の上席が好き。

4) 宴会の上座が好き。

みんなの注目を浴び、名声を受けたいとする願望があったのです。

5) やもめの家を食いつぶす。

自分の地位を利用して利得をむさぼろうとしていました。

6) 見栄を飾るために長い祈りをします。

彼らは常に人の目しか意識していない。人から霊的だと言われたいから、わざわざ人の目に付くところを選んで長い祈りをしました。

マタイの福音書のすべてを用いて、パリサイ人たちの罪が指摘されています。パリサイ人は、神の裁きの座に立つ時に、あなたが行ったよいわざとあなたが行った悪いわざとを比較して、よいわざが多ければあなたは天国に行けると教えたのです。もしそういう教えを我々が神様から受けていたとしたら、この救いは我々にとって物すごく重荷になります。なぜなら、いいことをしても次の瞬間に罪を犯して

いる私たちの生活を振り返ってみれば、明らかです。

5 節に「経札の幅を広くしたり」というところがあります。今でも、厳格なユダヤ人たちは皮製の黒い箱の中に申命記 6 章のみことばを紙に書いて入れ、自分の額や腕につけています。彼らは聖書の中の神の教えを守ってきたのです。神様がこれを命ぜられた目的は、私たちの思いが常に神様の思いと一致し、我々の行いが常に神の前に正しくあるようにです。ところがいつの間にか目的が忘れられて、それをつけることが目的になり、律法学者たちは、札の幅を広くして自分の霊性が勝っていることを示そうとしたのです。

その次の衣の房も同じことです。衣の四隅に房をつけるのは、神様のことを常に覚え、それを見るたびに、いつも自分の心を吟味して神を見上げるといった目的を彼らは忘れてしまい、衣の房を長くして自分がより高貴な存在であることを見せびらかそうとしたのです。

気をつけなければならないのは、私たちも何のために犠牲を払って礼拝にやって来るのかです。我々が本当に神様を愛するために、それを行うのなら祝され、喜ばれます。しかし、来ることが、奉仕をすることが目的になってしまったら、我々は律法学者やパリサイ人と同じ過ちに陥ってしまいます。

マタイの福音書 7 節に「広場であいさつされたり、人から先生と呼ばれたりすることが好きです」とあります。この先生という言葉は原語では「ラビ」と記されています。このラビという称号は「偉大なる方」とか「最も知恵のある方」という意味を持っています。彼らはそう呼ばれることによって、私だけが真理を教えることができるということを見せびらかせたかったのです。

また、父と呼ばれてはならないとあります。彼らは霊性において一般の人よりも偉大で、あたかも霊的祝福を人々に与えるような存在だと人から思われることを望んだのです。

カトリック教会では、人間よりもはるかに優れた存在、彼の言葉は聖書に匹敵すると思われる法王という存在があります。そんな人はいません。みんな罪人です。みんな主の恵みによって救われたにすぎないのです。しかし、律法学者やパリサイ人たちは、一般の人よりもはるかに優れているという間違っただけのプライドを持って、このような行為をし、人々に強要したのです。だからイエス様はそのことを非難されたのです。

マタイの福音書 23 章 13 節から「忌まわしいものだ」という言葉が 7 回繰り返されています。14 節の欄外を見ると、「異本に、この節を欠くものもある」という注釈があるため、14 節は括弧になっていますが、これを入れると 8 回出てきます。そしてここにイエス様がパリサイ人や律法学者を責められた理由が記されているのです。

1) 律法学者やパリサイ人たちは自分たちが救いを受け入れないだけでなく、人々が救われないように邪魔していたから。

2) 彼らは偽りの信仰で人々を破滅へと導こうとしたから。

彼らの語ったメッセージは間違っていました。その人を自分よりも倍も悪いゲヘナの子にするからです。

3) 誤った解釈をもって人々を混乱させたから。

4) 誤った優先順位をもって人々を混乱させたから。

彼らは、誠実や正義を横に置いて、いけにえを優先したのです。

5) 彼らの偽善。

「杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。」とあります。皆さんが食事に呼ばれて、すばらしいお皿の上に腐った食事が乗っていたらどうでしょう。彼らはそんな状態で、見かけは立派でも、心は神の前に全然開かれていない。

6) 見せかけは霊的でも心の中が汚れているから。

27 節で、「あなたたちは白く塗った墓のようなものだ。」とおっしゃいます。この当時、墓に触れたらその人は穢れると言われていました。過ぎ越しの祭りに集まってきた人々が墓に触れないために白く塗っていましたが、イエス様はこの白い墓の様子を用いて、実はあなた方はどんなにきれいに白く塗っても、その内側は死人の骨やあらゆる穢れたものがいっぱいだと非難されました。

7) 救世主を殺そうとしていたから。

彼らはもし先祖の時代に生きていたら、あの預言者たちを殺したりしなかったと言いました。しかし、

ではなぜ人々が待望していた完全な救世主である私を殺そうとするのか、その時代に生きていてもあなたたちは今と同じことをしているはずだ、何という偽善者なのかと、イエス様は彼らを責められたのです。

しかし、マタイ 23 章 37 節に、「ああ、エルサレム、エルサレム。」という言葉が出てきます。マルコの福音書にもルカにも出てきません。イエス様が奇跡を行われ、すばらしい教えをなしてこられたにもかかわらず、律法学者たちはイエス様に心を開こうとしない。それだけではなく、人々を惑わし、滅びの道に導こうとしている。正に悪魔の手先として働いていた彼らを見て、イエス様は涙を流すのです。どれほどイエス様が滅びに向かっていったこれらの人々のことを愛しておられたか。一人でも多くの人がこのすばらしい救いに至ることをどれほど望んでいらっしやっただかが窺い知れます。そのことを我々は忘れてはならないのです。イエス様はこんな律法学者たちでさえも、愛をもって、忍耐をもって待ち続けていらっしやるのです。私たちも同じように、一人でも多くの魂が救いに至るように、あきらめることなく、その人たちのために心から祈っていくことです。

マルコの福音書の 41 節に、皆さんよくご存じの一人のやもめの話が出てきます。恐らくこれまでの出来事は、神殿の中の異邦人の庭と言われる一番広いところで行われていました。この後、イエス様は異邦人の庭から、婦人の庭に入る門のところに座って、人々の様子をごらんになっていました。この婦人の庭には 13 の献金箱がありました。7 つは神殿のため、残りの 6 つは自由献金の箱でした。箱の上についているラッパみたいなものに献金を入れたので、ラッパと呼ばれていました。多くの人々がやって来て、お金持ちは大金をそこに投げ入れていました。それに対比して一人のやもめが、レプタ銅貨 2 枚の献金をしたのです。今の日当を 1 万円とすると、1 レプタ銅貨というのは 78 円、2 枚で 156 円ぐらいです。これを見て、イエス様は彼女を賞賛なさいました。彼女は生活費の全部を投げ入れたのだから、ほかのどの金持ちよりも多くの献金をしたとおっしゃったのです。

彼女はなぜそんなことができたのでしょうか。それは彼女がイエス様のこと、神様のことを心から愛し、神は私の必要を与えることができになるという真実を信じていたからです。神様を愛するというのは、犠牲的に捧げることです。世の中から見たら、地位もないこの女性にだれも目を止めなかったかもしれない。しかし、こうして今 2000 年たって、この女性の行為によって、我々が励ましを受けているのです。神様は、私たちの身分や社会的地位、財産をごらんになってではなく、私たちの心をごらんになっているのです。神様の関心は私たちの働きではなく、私たちがどんな思いをもってその行為をなしているかです。

お金は、神様の栄光のために、神様から託されたものです。例えばお父さんのプレゼントを買うために、お父さんにお金をもらうようなことです。これは私の分で、これは神様の分ではなく、全部神様のものです。だから我々が神の前に立った時に、神様から問われるのは、神が神のために用いなさいと託されたものを神のために用いたのかどうか。そういうふうにいるならば、我々はちゃんと天に宝を積むこととなります。

アメリカにこんなゴスペルがあります。

——主に仕えることは私の目標です。

どうしてそれを抑えることができましょう。

私のものと言えるすべてのものは、実は主が私に与えてくださったものです。

それは私自身のものではなく、主の所有物です。

主の命令こそ私の願いそのものです。

主が私に求められることに関しては、どのような結果が伴おうとも、

喜んで犠牲を払います。

私は犠牲を伴わない捧げ物は何も捧げません。

私は私の最高のものだけを主に捧げます。

これはただお金の話だけではない。私たちの時間も、才能も、きょうという一日も、そのすべては神様の栄光をあらわすために、神様が私たちに託してくださったものです。あなたはそのためにそのすべてを用いていらっしやいますか？

あなたは神様に最高のものを捧げていますか？

あなたは犠牲をもってあなたの愛をあらわしていますか？

それとも神様に残り物を捧げているのでしょうか？

律法学者たちに対して愛を示し続けてくださったイエス様。

彼らやあなたや私を救うために、命という最も大切なものを捧げてくださったイエス様。

イエス様はこの女性のように、心から神を愛するゆえに犠牲を払う人を喜ばれるのです。神様があなたに問いかけていらっしゃるのには、あなたがこれからどんなふう生きていくか。どんなふうにあなたの感謝と愛をあらわしていくかです。どうぞこの愛する一人の姉妹の行為を見てください。そしてその行為以上に、その行為をもたらした神様に対する愛を思い出してください。願わくば、そんな愛が私たちの心を支配することを望みます。我々も同じように、そんな愛で神様に感謝をあらわしていきたいものです。